



“コロナ規制が緩和して”の雑感

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 理事

一般財団法人日本花普及センター 理事

腰岡 政二

2020年の正月に発生した新型コロナウイルス感染症に関する制限規制（コロナ規制）により、日々の生活が激変した。私が勤めていた大学では、卒業式や入学式などを含めた各種イベントが縮小あるいは中止となり、講義や実習などは可能な限りリモートが主体になった。大学に限らず、社会全体がコロナ規制の煽りを受けたのはご存じの通りである。この間、私自身はワクチン接種のおかげか、幸いにも発症することはなかった。しかし、研究大国と自負する割には、自国でのワクチン開発が進んでおらず、他国の製品に頼らざるを得なかったのはまことに情けない話である。新型コロナウイルス感染症の発生からまる3年を経過したこの5月に、本感染症の感染症法上の位置づけが2類相当から5類に変更され、それにより、コロナ規制が大幅に緩和されることになった。おかげで、教育現場や社会における活動が速やかに正常な状態に戻りつつあるのは喜ばしい反面、鉄道や繁華街での雑踏の戻りには幾分危惧を覚える。というのも、新型コロナウイルス自体が消滅したわけではなく、感染第9波が起きる可能性が指摘されており、今まで通り注意するに越したことはない。一方、コロナ規制のおかげで、ウイルスに関する知識と感染防止の対策法が身近なものとして広まったことや、Webを通じた情報の共有が進んだことも事実である。

私事ではあるが、コロナ規制が始まった真ただ中で、13年間を務めた大学での定年退職を迎えた。もちろん、予定されていた最終講義やパーティなどの催しは、中止あるいは無期延期となった。しかし、規制緩和と同時に、退職した研究室から、最終講義の意味合いも兼ねた特別講義を実施したいとの連絡があった。3年間のブランクがあつての講義でもあり、気恥ずかしい思いがあつたが、ありがたくお受けすることにした。4年次学生を対象とした講義にもかかわらず、多くの卒業生や関係者にも参加をいただき、懐かしくまた楽しく講義を行えたことに心から感謝したい。さらに、その後のパーティでは、参加者の皆が現役当時に戻ったような、久しぶりの同窓会的な雰囲気を楽しめることができた。これもまた、規制緩和のおかげである。

さて、この特別講義では、植物の成長調節とそこに関わってきた自分自身の研究活動を題材としてお話したが、こ

れを機に今一度、自身の研究活動を振り返ってみた。研究者としての道に足を踏み入れたのは、大学院博士課程を中退し大学助手となったことに始まる。縁あって、30歳で海外留学した時に問われた“What do you want to do in the future? (何がしたいのか?)、What can you do now? (何ができるのか?)”の言葉を座右の銘として、その後の40年間を、異動は繰り返したものの、公的研究機関や大学でのいずれの場所であっても、同じテーマを対象として研究に取り組めたのは幸せであった。一方、長い研究生活の中で、尊敬できる指導者や信頼できる共同研究者に恵まれ、多くの研究論文を作成することができたが、それらの研究において十分に意図したことが解明できたのか、また、それらの成果でわずかでも社会貢献に寄与できたのかを考えてみると、まことに心もとない。

どのような研究であっても、履行するためには当然ながら資金が必要である。公的研究機関や大学では、バブル経済が崩壊した後も数年間は、潤沢とは言わないまでも、短期間での研究成果を求められることもなく、いわゆる基礎研究に没頭できた感がある。その後、経常研究費の枠がどんどん縮小され、思い通りの研究を実施するには、それが基礎研究であっても、競争的資金の獲得が必要となった。そのために、目先の成果を得ることに汲々とし、腰を落着けた研究がしにくくなったのも事実である。確かに、Gサイエンス学会の共同声明では、基礎研究の重要性を謳い、基礎研究に対する長期的な公的資金の回復とその維持を勧告している。また各界から、基礎研究の重要性が叫ばれていることもあり、政府は「10兆円規模の大学基金」の創設などで、基礎研究力強化に向けた施策を実施してはいるが、多くの研究者にとっては、経常研究費の充実の方が有難いのではなからうか。もちろん、経常研究といえども、独りよがりになりがちな研究を避ける意味でも、外部評価が必要であることは言うまでもないが・・・。

貴重な巻頭言を、たわいもない雑感で汚すことになったが、年寄りの戯言としてお許し願いたい。